コロナ陽性

赤谷慶子

コロナ感染このかた下火になりたりとおほかたの人考へたりと覺ゆ。然れども、逆に流行すること實情なり。卯月十二日に九度近くの發熱あり、翌日には下がりしものの喉の激痛は續く。通常の風邪なるらむと考ふるも、倦怠感ひましに強く、週末は自宅靜養となりにけり。翌月曜日に虎ノ門病院にて定期超音波檢査を受くる豫定なれば、病院受け附けには發熱ある事、喉の痛みある事などを告げて、超音波檢査受くべきものや問ひ合はせたり。熱下がりたれば問題無しと言はれ、檢査を受く。さりとて自ら體調尋常ならずと思ひ、近くの高輪病院(舊船員病院)にPCR檢査依頼の電話かけたり。「今日の檢査は終はりて、明朝八時三十分よりの發熱外來受くべし」との指示あり。翌朝PCR檢査受けし後「コロナ陽性」と判明。醫師よりアセトアミノフェン(カロナール)及び喉の激痛緩和するトランスフォミン藥處方せられて歸宅せり。コロナ特効藥はなほ存在せずと確信せり。我症狀重篤とは受け止められず、自宅療養を勸告せられたり。加へて「もし喉の激痛にて水分取れずして脱水症狀を起したらむには夜半にても救急車にて來院すべし」との由。藥は五日分處方せられたり。味覺の無くなる症狀多きなか、おのれは絶えてならねど、喉の痛み甚だしく飲食もままならず。その後も倦怠感續き、高熱出でたれば體ふはふはする感覺續く。二週間經れどもおこたらず、こたびは喘息になりしほどの呼吸の苦しさ重なりき。咳に苦しむことなきも、痰のからむことひとかたならず。近傍にかかりつけの醫院あり、ここにて診察を受くるに、「コロナの後遺症」と言はれ、ステロイドの氣管支炎症治る藥處方せられたりき。ひと月も經ば完治するならむと醫師より言はる。コロナ菌の毒性近頃弱まりたりとも聞く。然れども、我が身の疲弊かくのごとし。細菌の弱まりたりしとは夢樂觀すべからずとは思ひ知りたり。

（令和六年四月二十八日受附）